



Save The Earth

地球温暖化について

二酸化炭素などの温室効果ガスは太陽からやって来た熱が、すぐに地球から逃げていかないように大気中に吸収して蓄え、反射して地表に引き戻す働きをしています。そのため地球が冷えすぎないで、地球の平均気温がだいたい15℃くらいの現在の温度に保たれているのです。しかし温室効果ガスが増えすぎてこの働きが強くなり過ぎると地表の温度が今より上がります。これが問題の地球温暖化の現象です。

地表の温度が上がると地表近くの空気が暖められ軽くなって上昇します。上昇気流が今までよりも強くなると、低気圧も今までより大きくなります。台風も上昇気流によって発生する現象ですから強くて大型の台風になります。こうして熱帯で生まれた台風は赤道付近の熱を温帯へ運んでいき、温帯でも海水の温度が上がります。普通、台風は日本付近に近づいたら弱まって熱帯低気圧になりだんだん消えていきます。台風のエネルギーの元は暖かい海水から蒸発した水蒸気であるということは前に書いたことがあります。つまり水蒸気が渦に巻き上げられて上空に行くとき冷やされて水滴に変わります。その時1グラムについて約600カロリーもの潜熱(蒸発熱)を放出します。それでその空気の塊は周囲の空気よりも温度が高くな

ります。温度が高くなると軽くなるので更に上昇します。そうすると下にはその空気を埋め合わせるために周囲の空気が集まってきて上の空気を押し上げます。このようにして集まってきた空気もどんどん上昇して上昇気流は発達して、暖かい海水からの蒸発によって上の方で潜熱を放出する限り渦は発達し、つまり台風は続くわけです。海水の温度が低くなると台風は弱まって消えていきます。それで陸地が上がると、陸地では海のように水蒸気が上がらなくなるので急速に弱まっていきます。ところが温帯でも海水の温度が高まってくると、台風が強いまま温帯の陸地を襲うことになります。台風が凶暴になってくるということです。海水の温度が上がると海水の蒸発量が増え、空気中の水蒸気量が増えます。そうすると今まで雨の多かったところは更に雨が多くなります。雪も増えます。豪雪地帯といわれるところは更に雪が多く降り、多雨地域は更に雨が多くなり、洪水をはじめいろいろな災害が多くなると考えられます。

温暖化によって気温が上がると、ともに温度が高い砂漠や乾燥地域では更に水分の蒸発が進んで土地が乾き、砂漠化が進んでいきます。世界全体の豪雨や干ばつが増えて、雨の多い所と少ない所の差が拡大し、地球の温暖化は異常気象を引き起こしやすく

なり気象の凶暴化の原因になるといわれます。

雨の量は農業に直接影響します。多過ぎると洪水や土砂崩れなどの災害が多くなるし、水不足になると作物は育ちません。特に日本のようなモンスーン地帯はヒマラヤ山脈やチベット高原が偏西風(ジェット気流)の流れを遮り、春から夏にかけてヒマラヤの南北に分かれて吹いた気流がオホーツク海で合流し、小笠原高気圧との間に梅雨前線を作り出すというような大規模な空気の流れに支配されているような季節の移り変わりが、温暖化による偏西風の変化によって梅雨の降水量が変わるのではないかとという心配もあります。

歴史調査の楽しみ方

志口永城跡 9

大田 幸博

(元 菊水町史編集委員会副委員長)

天明8年(1788)頃に編纂された『古城考』は、江戸時代の城郭集成本として知られます。三巻か

らなり、目録の古城は、全部で275城です。しかし、本文中には、何故か、1城が欠けています。さらに、肥後藩の飛び地領土であった豊後鶴崎の8城が含まれていますので、実質、266城の記載になります。近年に至るまで、諸文献の古城の記述は、ほとんど、この書物によっていました。現在、県内で把握されている中世城跡は533城ですから、掲載率は50%弱になります。つまり、半分近くの城跡が、『古城考』から抜け落ちていることとなります。志口永城跡も、その中の1城跡です。

和水町の中世城跡は、26城跡を数えます。この中で『古城考』に記載があるのは、牧野城跡・鶯原城跡・日平城跡・萩原城跡・神尾城跡・岡原城跡・坂本城跡・田中城跡・今古閑城跡・簾置城跡の10城跡です。掲載率は、38%強です。

次に、『菊水町史』から、旧菊水町の城跡を説明します。文献に城主名の記述があるのは、萩原城跡・日平城跡・牧野城跡。文献に未記載ながら歴史的な背景があるのは、焼米城跡・内田宮山城跡・江田城跡・立石城跡。文献に合戦の記述があるのは、萩原城跡・日平城跡・牧野城跡。伝承があるのは、和仁石山城跡です。一方で、地名だけで、城跡と判明されるのは、志口永城跡・小乙城跡・乙城跡・内田今城跡・江栗城跡の5城跡です。この5城跡に加えて、立石城跡・江田城跡・焼米城跡・内田宮山城跡・和仁石山城跡の計10城跡が、文献未記載の城跡になります。

では、何故、志口永城跡のような事例が生じるのでしょうか。第二に、中世城跡の時代幅が考えられます。少なくとも、鎌倉時代半ばから戦国時代末期まで存在しました。そのために、4世紀近くの時間枠があります。ですから、極めて早期の城は、草木に埋没して、江戸時代に

は、調査の対象外になった可能性があるのです。当然、伝承なども、時間の経過と共に消え去っていきます。

第二に、「城は、そもそも、戦の副産物である」との格言を思い起こす必要があります。つまり、城は、戦にならないと文献に登場しないのです。ですから、例えば立派な縄張りを持つていても、戦の舞台にならなければ、物語は生まれず、単に、その地に城があつたという程度で終わってしまふ事もあるのです。その場合、城地に関係ある地名だけが残ります。この事に関連して、『古城考』などの江戸時代本に書かれた合戦の内容について、疑問視する向きもありますが、私は、「火の無い所に、煙は立たない」という諺にあるように、何らかの下地があつて物語が生まれると思っています。

第三に、城の在り方です。戦国時代になると、領主は、本城を核として「面の支配」を行い、要所に支城を配置しました。したがって、支城群を二括して取り

扱ったとも考えられます。その様に見な

せば、こと細かな城名は、存在しない事になります。大学時代には「里歩くと、城に出会う」と教わりました。城を群として捉える事は、必要なことのようにです。

小結 文献未記載の理由について

志口永城跡 実戦を経験しなかったからでしょう。それ以外に、考えられませんが。戦国時代の「逃げ込み城」で、「二級品の縄張りを持っています」。

焼米城跡・江田城跡 早期の城跡と思われる。両城跡ともに、鎌倉時代の「弘安の役」の海戦が描かれた『蒙古襲来絵詞』に、城主のルーツにあたる武将名が記載されています。前者は、「やいこめ五郎」で、15世紀後半に、焼米氏の血を引く一族が城地に存在しました。後者は、「ゑたの又太郎ひていゑ」です。「えた」は、江田のことで、名字の地は、菊水の江田と見なされます。

他の7城跡 戦国時代の支城群と思われる。